

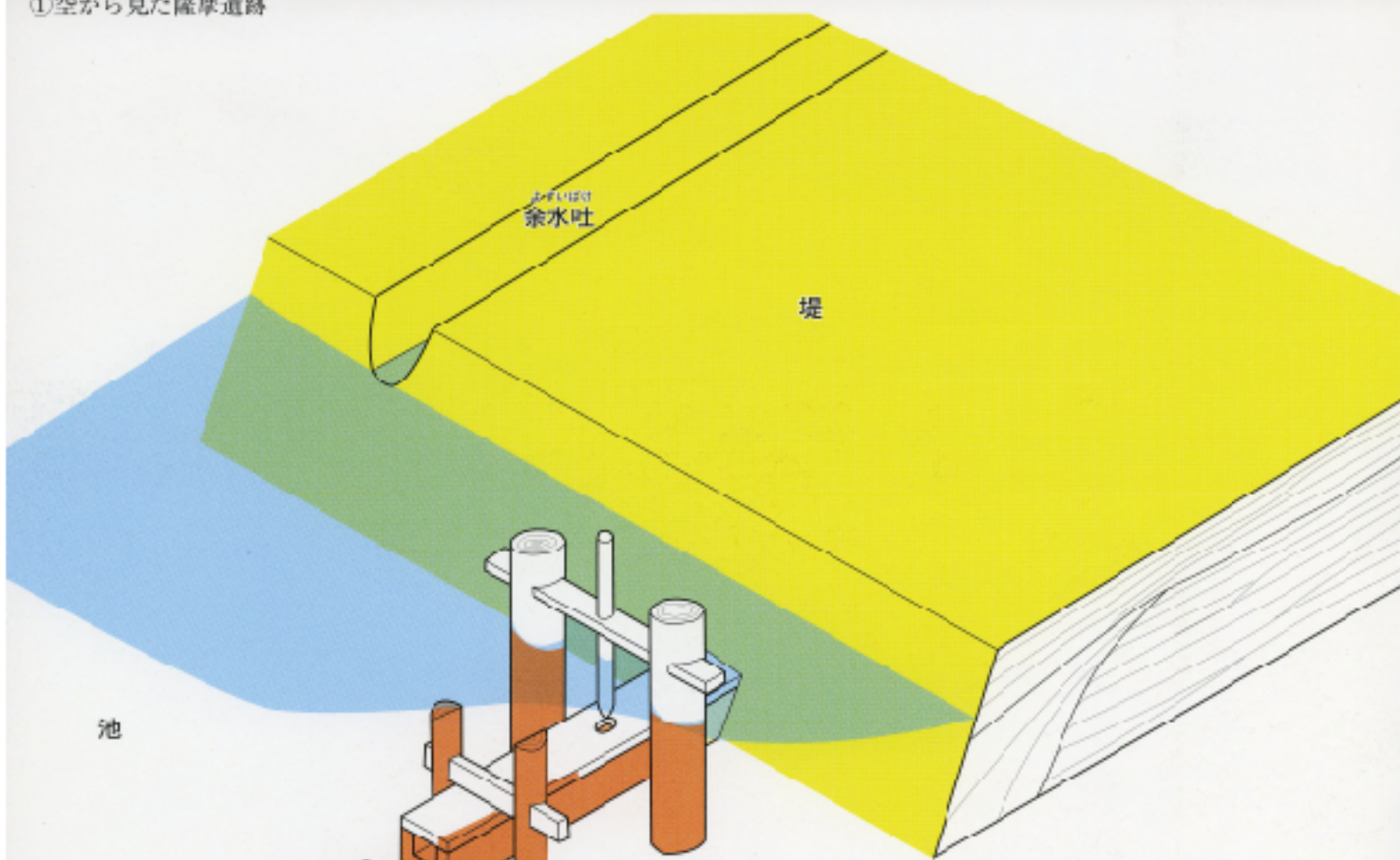
# 薩摩遺跡第10次調査現地説明会資料







①空から見た薩摩遺跡



赤で塗ったところは実際に残っていた部分

②木樋の構造





③木槌の継目に巻かれた樹皮（杉の皮）



写真③

写真④

©木槌舎



④木槌と堤の断面



⑤敷帯工法 堤の最下層で見つかります





## はじめに

薩摩遺跡は、高市郡高取町薩摩・松山に位置します。この遺跡は、国道169号線高取バイパスの建設にさきだつて2004年から発掘調査が続けられており、弥生時代～奈良時代の墳墓、奥落、水利施設などが見つかりました。特に、2008年の調査では、古代につくられたと考えられる池が見つかりました。今回の調査（第10次）は、昨年度の調査の続きにあたります。

## 第10次調査の概要

今回の調査では、尾根と尾根とはさまれた谷地形の中に土を盛って築かれた堤が見つかり、この池が谷の一部をせき止めて作られたことが明らかとなりました。

池の中の上から奈良・平安時代の土器が多く出土したことから、この池が古代に作られたものと考えられます。また、中世の土器を含む土が、堤の上を覆っていることから、中世には池が埋まっていることが分かります。

堤は、粘り気のある土とサラサラの土を交互に入れ、何度りつき固めて順次作られています。この際、谷の中の軟らかい土の上に堤を築く必要があるため、あらかじめ木の枝を敷いた上に盛土をおこなうという工夫が見られます。これを「敷築工法」と呼んでいます。

堤の西端で、水を通すための木樋が見つかりました。木樋は古いものから新しいものへ、4回設置されています。何度も修復を繰り返しながら、用水の確保のため池が大切に管理されていたことを物語っています。

## 木樋の構造

3回目に設置された木樋は最も残りが良く、長さ約15m、幅約50cm、厚さ約30cmのもので、丸太を引抜いて作った2本の樋をつないでいます。蓋は、大半が上の中で腐っていたためにあまり残っていませんが、元々は樋の上に蓋が被せてありました。木樋の南端には、蓋を固定するための杭が打ち込まれてあります。

同じく南端には水面より上に足場を組むための、柱が埋められています。この足場の上から、棒（杭）を上げ下げすることで水を流したり、止めたりしたものと考えられます。木樋の北側には、池の水を下流に流す

ための溝が続いています。

また、木樋を設置するに当たっては、様々な工夫が見られます。たとえば、重い木樋が土の中で沈んで傾かないように、あらかじめ底に枕木を敷いています。2本の樋の継目には、杉の皮を巻きつけて水が漏れるのを防いであります。また、蓋との合わせ目にも杉の皮を巻きつけて、木漏れを防止しているようです。これらは、現在のパッキンの役割を果たす工夫です。

## まとめ

今回の調査成果をあらためてまとめると、つぎの通りです。

- ① 古代の池が見つかったこと。奈良県で古代の池が実際に発掘されたのは初めてです。
- ② 池の堤の作り方が分かったこと。池づくりは、農業のための水の確保には欠かせない重要な技術です。このような技術が、いつ頃から生まれ、どのように発達したのか、具体的に考える資料が得られました。
- ③ 木樋が4回にわたって据えられていることが分かったこと。木樋の設置にあたって様々な工夫をしていることも興味深い点ですが、その木樋を同じ場所で何度も繰り返し据え直すということも重要です。池の底に土が溜まるにしたがって、せき止めや、堤の修復などしつつ、徐々に木樋を上の方に移動させているわけです。これは、数百年もの間、池を維持・管理して農業を営む人々が、この地に住んでいたことを物語っています。

このほか、昨年の調査では、池の口から波多里長檜前村主が池を作った」と記された木簡が出ました。このことから、檜前を治めた有力者が中心となって、この池を作ったことがうかがえます。一体、檜前の範囲はどの程度であったのでしょうか。また、この池に貯めた水が潤す田畑は、どれほどの面積であったのでしょうか。このようなことが明らかとなれば、日本の古代土地開発がどのように行われたのか、具体的な姿を知ることができるのではないのでしょうか。

(北山峰生・大野壽子)

表紙 発見景 (南西から)

## 高取町 薩摩遺跡第10次調査 現地説明会資料

2009年11月28日

奈良県立橿原考古学研究所

〒634-0065 奈良県橿原市欽傍町1番地 Tel. 0744-24-1101

<http://www.kashitoken.jp/> (ホームページでも現地説明会の案内・説明内容をご覧いただけます)